

かぶと虫

新美南吉

青空文庫

お花畑から、大きな虫が一ぴき、ぶうんと空にのぼりはじめました。からだが重いのか、ゆっくりのぼりはじめました。

地面から一メートルぐらいのぼると、横に飛びはじめました。

やはり、からだが重いので、ゆっくりいきます。うまやの角かどの方へ、のろのろといきま
す。

見ていた小さい太郎は、縁えんがわ側からとびおりました。そして、はだしのまま、ふるいを
持つて追っかけていきました。

うまやの角をすぎて、お花畑から、麦畑へあがる草の土手どての上で、虫をふせました。
とつてみると、かぶと虫でした。

「ああ、かぶと虫だ。かぶと虫とつた。」

と、小さい太郎はいいました。けれど、だれも、なんともこたえませんでした。小さい
太郎は、兄きょうだい弟がなくてひとりぼっちだったからです。ひとりぼっちということは、こ

んなとき、たいへんつまらないと思います。

小さい太郎は、縁側にもどつてきました。そしておばあさんに、

「おばあさん、かぶと虫とつた。」

と、見せました。

縁側えんがわにすわつて、いねむりしていたおばあさんは、目をあいてかぶと虫を見ると、

「なんだ、がにかや。」

といつて、また目をとじてしまいました。

「ちがう、かぶと虫だ。」

と、小さい太郎は、口をとがらしていいましたが、おばあさんには、かぶと虫だろうががにだろうが、かまわないらしく、ふんふん、むにやむにやといつて、ふたたび目をひらこうとしました。

小さい太郎は、おばあさんのひざから糸切れをとつて、かぶと虫のうしろの足をしばらくしました。そして、縁板えんいたの上を歩かせました。

かぶと虫は、牛のようによちよちと歩きました。小さい太郎が糸のはしをおさえると、前へ進めなくて、カリカリと縁板をかきました。

しばらくそんなことをしていましたが、小さい太郎はつまらなくなってきました。きっと、かぶと虫には、おもしろい遊び方があるのです。だれか、きっとそれを知っているのです。

二

そこで、小さい太郎は、大頭に麦わらぼうしをかぶり、かぶと虫を糸のはしにぶらさげて、かどぐち門口を出ていきました。

昼は、たいそうしずかで、どこかでむしろをはたく音がしているだけでした。

小さい太郎は、いちばんはじめに、いちばん近くの、くわ畑の中の金平きんべいちゃんの家へいきました。金平ちゃんの家には、しちめんちようを二わかっていて、どうかすると、庭に出してあることがありました。小さい太郎はそれがこわいので、庭まではいっていかないで、いけがきのこちらから中をのぞきながら、

「金平ちゃん、金平ちゃん。」

と、小さい声でよびました。金平ちゃんにだけ聞こえればよかったからです。しちめん

ちようにまで、聞こえなくてもよかつたからです。

なかなか金平ちゃんに聞こえないので、小さい太郎は、なんどもくりかえしてよばねばなりませんでした。

そのうちに、とうとう、うちの中から、

「金平はのオ。」

と、返事がしてきました。金平ちゃんのおとうさんのねむそうな声でした。

「金平は、よんべから腹はらがいつてのオ、ねておるのだで、きようはいつしよに遊べんぜ
エ。」

「ふうん。」

と、聞こえないくらいかすかに鼻の中でいつて、小さい太郎はいけがきをはなれました。
ちよつとがっかりしました。

でも、またあしたになつて、金平ちゃんのおなががなおれば、いつしよに遊べるからいいと思いました。

こんどは、小さい太郎は、ひとつ年上の恭一君きょういちの家にいくことにしました。

恭一君の家は、小さい百ひやく姓家しやうやでしたが、まわりに、松や、つばきや、かきや、とちなど、いろんな木がいっぱいありました。恭一君は木のぼりがじょうずで、よくその木のぼっていて、うかうかと、知らずに下を通ったりすると、つばきの実を頭の上に落としてよこして、おどろかすことができました。

また、木のぼっていないときでも、恭一君はよく、ものかげや、うしろから、わっといつてびっくりさせるのでした。ですから小さい太郎は、恭一君の家の近くになると、もうゆだんができませんのです。上下左右、うしろにまで気をつけながら、そろりそろりと進んでいきます。

ところがきょうは、どの木にも恭一君はのぼっていません。どこからも、わっといつてあらわれてきません。

「恭一はな。」

と、にわとりに餌えさをやりに出てきたおばさんが、きかしてくれました。

「ちよつとわけがあつてな、三河みかわの親類へきのう、あずけただかな。」

「ふうん。」

と、小さい太郎は、聞こえるか聞こえないくらいに、鼻の中でいいました。なんということでしょう。なかのよかつた恭一君が、海のむこうの三河みかわのある村に、もらわれてしまつたということです。

「それで、もう、もどつてきやしん？」

と、せきこんで小さい太郎はききました。

「そや、また、いつかくるだらあずに。」

「いつ？」

「ほんや正月にや、くるだらあずに。」

「ほんとだねお婆さん、ほんと正月にやもどつてくるね。」

小さい太郎は、望みをうしないませんでした。ほんにはまた、恭きょういち一君と遊べるのです。正月にも。

四

かぶと虫を持った小さい太郎は、こんどは細い坂道をのぼって、大きい通りの方へ出ていきました。

車大工さんの家は、大きい通りにそつてありました。その家の安雄やすおさんは、もう青年学校にいつているような大きい人です。けれど、いつも、小さい太郎たちのよい友だちでした。じんとりをするときでも、かくれんぼをするときでも、いっしょに遊ぶのです。安雄さんは小さい友だちから、とくべつに尊そんけい敬されていました。それは、どんな木の葉、草の葉でも、安雄さんの手でくるくとまかれ、安雄さんのくちびるにあてると、パイと鳴ることができたからです。また安雄さんは、どんなつまらないものでも、ちよつと細工をして、おもしろいおもちゃにすることができたからです。

車大工さんの家に近づくにつれて、小さい太郎の胸むねは、わくわくしてきました。安雄さんがかぶと虫でどんなおもしろいことを考え出してくれるかと、思ったからです。

ちようど、小さい太郎のあごのところまであるこうしに、首だけのせて、仕事場の中をのぞくと、安雄さんはおりました。おじさんとふたりで、仕事場のすみのといしで、かなの刃はをといでいました。よく見るときようは、ちゃんと仕事着をきて、黒い前だれをかけています。

「そういうふうに入力するんじやねえといたら、わからんやつだな。」

と、おじさんがぶつくさいいました。安雄さんは、刃のとき方をおじさんにおそわっているらしいのです。顔をまっかにして一生けんめいにやっています。それで、小さい太郎の方を、いつまで待っても見えてくれません。

とうとう、小さい太郎はしびれをきらして、

「安さん、安さん。」

と、小さい声でよびました。安雄さんにだけ聞こえればよかったのです。

しかし、こんなせまいところでは、そういうわけにはいきません。おじさんが聞きとがめました。おじさんは、いつもは子どもにもむだぐちなんかきいてくれるいい人ですが、きようは、なにかほかのことではらをたてていたとみえて、太いまゆねをびくびくと動かしながら、

「うちの安雄はな、もう、きようから、一人まえのおとなになったでな、子どもとは遊ばんでな、子どもは子どもと遊ぶがええぞや。」

と、つっぱなすようにいいました。

すると安雄さんが、小さい太郎の方を見て、しかたがないように、かすかにわらいまし

た。そしてまたすぐ、じぶんの手先に熱心な目をむけました。

虫がえだから落ちるように、力なく、小さい太郎はこうしからはなれました。そして、ぶらぶらと歩いていきました。

五

小さい太郎の胸むねに、深い悲しみがわきあがりました。

安雄さんはもう、小さい太郎のそばに帰ってはこないのです。もういつしよに遊ぶことはないのです。おなかがいいたいなら、あしたになればなおるでしょう。三河みかわにもらわれていったって、いつかまた帰ってくることもあるでしょう。しかし、おとなの世界にはいった人が、もう子どもの世界に帰ってくることはないのです。

安雄さんは、遠くにいきはしません。同じ村の、じき近くにいます。しかし、きょうから、安雄さんと小さい太郎は、べつの世界にいます。いっしょに遊ぶことはないのです。

小さい太郎の胸には、悲しみが空のようにひろく、深く、うつろにひろがりました。

ある悲しみは、なくことができます。ないて消すことができます。

しかし、ある悲しみはなくできません。ないたつて、どうしたつて、消すことはできないのです。いま、小さい太郎の胸むねにひろがった悲しみは、なくこのでできない悲しみでした。

そこで小さい太郎は、西の山の上にひとつきり、ぽかんとある、ふちの赤い雲を、まぶしいものを見るように、まゆをすこししかめながら、長いあいだ見ていただけでした。かぶと虫がいつか指からすりぬけて、にげてしまったのにも気づかないで――。

青空文庫情報

底本：「童話集 こんぎつね―最後の胡弓ひき ほか十四編」講談社文庫、講談社

1972（昭和47）年2月15日第1刷発行

1988（昭和63）年1月30日第30刷発行

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年6月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

かぶと虫

新美南吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>